建築ふくい

家づくり 街づくり 人づくり

一般社団法人 福井県建築組合連合会

フクイ建設技術フェア 2面
技の祭典 2面
親子木工教室 4面
私の大工奉公時代 5面

http://www.kenchiku-fukui.com
e-mail:info@kenchiku-fukui.com

発行／(一社) 福井県建築組合連合会　〒910-0859 福井市日之出5丁目4番7号 電話 0776-54-2615 FAX 0776-54-8878　発行人／竹島正和　編集／教宣委員会

全建総連 第65回定期大会

最後に大会スローガンを確認

10月23日から25日、神奈川県横浜市のパシフィコ横浜を会場として、全国建設労働組合連合会第65回定期大会が開催されました。福井県連からは、私と副会長3名、会計理事1名、全国青協役員として1名が出席しました。

今回初めての試みとして、組織部に役員2名が参加、内1名は議長の大役を努めました。各県の拡大運動の取組み状況・意見交換などを行い、今後の福井県連の活動の参考にとの思いの取組みです。また、青年部役員の一員として1名参加し、青年部の活動や状況など知っていただいたとも思います。

その体験を福井県連青年部役員にも伝えて今後の運営に役立てて欲しいとも思います。

さて今回の大会では、多くの見直し案が出され可決となりました。特に私たち組合員にとって関係あるのが全建総連会費の値上げです。

現行月115円から135円となり20円値上がりし、年間240円上がることになり、県連としても年間約55万円の支出増となります。この会費増には多くの反対意見がありましたが、現行事業は維持していきたいとの執行部の意見で経費削減案が提出され、承認となりました。経費削減案としては、定期大会日数の削減、役員の削減および兼任、各部会会議のオンライン化が主な項目です。また福井県連総会でも要望があった、ハガキ要請行動について、ハガキ切手の高騰により各県負担増となるため要請行動の見直しをしてほしいとの要望に対しては、要請内容は変えずに行動は支部負担の件も検討してなんらかの対応をするとの返答がありました。

また国会議員、各省庁要請行動においては、これまで予算要求が主ですが、働き方改革の全面適用、担い手3方の条例制定確保など組合員に寄り添った要請行動にも力を入れていくとの返答もありました。

建設業界は、現在大変厳しい状況にあります。今後もこの状況は変わらない中で組合員に寄り添った運営に一歩進んだ大会であったのではないかと感じました。

最後に参加者みんなで大会スローガン「国会請願選択の歴史的成果を力に賃金・単価引上げ、組織増勢を勝ち取ろう」を確認して3日間の定期大会を終了しました。

会長　竹島正和

令和6年度 北信越地方協議会総会の開催

9月12日、新潟県新潟市のホテルサンルート新潟にて、北信越地方協議会の総会が各県から計37名が集まり開催された。全国建設労働組合総連合からは小倉範之書記次長が出席し、福井県建築組合連合会からは、竹島会長のほか、副会長3名、会計理事2名が出席した。

まず初めに、当番県である新潟県建設ユニオンの坂田健二執行委員長からあいさつがあり、「本総会がより良い情報交換や意見交換の場となることを願っている」と歓迎の意を表した。

次に長野県連の会長でもある花岡幸一全建総連副中央執行委員長からあいさつがあり、全国の動きや状況を踏まえながら北信越地域の日頃の協力体制に感謝を述べた。

議長選出に移り、議長は通例に沿って当番県の坂田執行委員長が務め、参加者全員が自己紹介を順に行った。協議に入る前に、全建総連の小倉書記次長から、能登半島地震で被災された方々への御見舞いの言葉と、仮設住宅建設への多大な協力について感謝の言葉があり、各県連組合との対応について中間報告をまとめたとの報告があった。今後も各県と情報交換を続け、最終的な報告書にまとめて今後に活かしていきたいと述べた。

協議事項では、一つ目に応急仮設木造住宅に係る労働者供給事業についての報告があり、今回のことを踏まえて災害対応を一連のものとして取り組むマニュアルの更新について検討するなど意見交換をおこなった。

二つ目には、10月23日～25日に神奈川県で開催される全建総連定期大会についての説明があり、大会の役割分担や表彰者が確認された。

三つ目には、北陸地方整備局への要請行動についての説明があり、各県が連携して行動をしていくことで合意した。

四つ目には、福井県連からの希望議題で、組織拡大の取り組み方や青年部との関わり方、SNSの活用状況をあげ、他県連ではどのような対応をしているかの意見交換があり、各事務局からの説明に対して質問なども活発に行われた。

最後に、次回の当番県の富山県建築組合連合会の花岡幸一執行委員長が閉会のあいさつを行い、総会は閉会となった。

夜には同会場で総会参加者全員が出席し、懇親会を行い、総会に引き続き情報交換を積極的に行って親睦を深めた。

翌13日には阿賀野市のヤスダヨーグルト工場見学と丸三安田瓦工業を視察した。

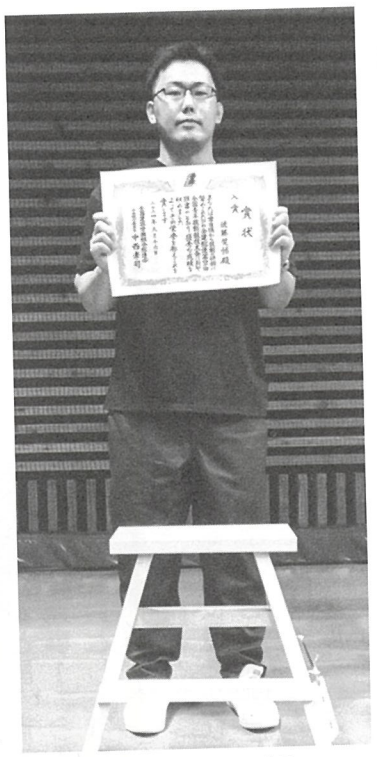
近隣県である北信越地区の各県連役員との意見交換は参考になる情報もたくさんあり、有意義な2日間となった。

副会長　南信博

意見交換を行う各県代表

技の祭典

～目指せ頂点 磨け技術～


来年は上位入賞を目指して

年に1度、全国から36歳以下の優れた若手大工が集まり、日頃鍛錬された技を競い合う全国青年技能競技大会が、9月14日～16日に愛媛県松山市にある愛媛県武道館で開催されました。40回を迎える今大会には51名の選手が出場し、福井県連からは近藤奨吾さんが出場しました。参加者は競技課題『四方転び踏み台』で、原寸図作成・カンナ掛け・墨付け・刻み・組立を、6時間の制限時間の中で、技を惜しみなく発揮しました。金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、入賞10名、計16名の選手に賞が贈られ、今回で10回目の出場となる近藤奨吾さんの競技結果は…見事10位入賞です。

点数配分の内訳ですが、現寸図の点数（約4割）・作品の点数（約6割）の合計で順位が決まります。作業時間40分程度の現寸図作成にこれだけ点数配分が高いのは、現寸図が元になり作品の墨付けが行われるため、この作業が基本中の基本だからではないでしょうか。私はこの現寸図の作成の作業が1番重要性が高いと思っていて、現寸図の精度が高ければ高いほど、作品の精度も高くなると思っています。そして今回の近藤さんの現寸図の順位はというと…1位…素晴らしい…もう熟練の域に達しています。作品の方も、部材のカンナ仕上げ、柱・貫（ぬき）の導突（どうつき）、通しホゾの仕口、柱接地面の寸法など、いつも通り素晴らしい出来栄えでした。減点箇所といえば、部材の角が多少欠けてしまった…そのためここで大きな減点があったと思われます。非常に悔やまれますがこれも実力の内。来年は山口県で開催されます。今後もモチベーションをしっかり保ち、今年以上の上位入賞することを願っています。

毎年のことなのですが、福井県に限らず全国からも参加人数が増えていません。寂しく思います。職人不足・現場で刃物を必要としないなどの影響もありますが、それよりも職人同士で競い合う貪欲さが、今の若手職人には欠けているようにみえます。人前で自らの技能を披露できるような度胸を持ち、子どもたちから憧れの思いを持たれるような職人にならなければ、大工を目指そうとする子どもたちも当然いなくなります。この競技で必要とされる、規矩（きく）術（じゅつ）・刃物の研ぎ・刃物の切れ味の追求など、知らないよりは知っていた方が良い、できないよりはできた方が良い、この道を極めないよりは極めようとする努力をした方が良い。これらの技能を継承できる、未来ある若者が挑戦してくることを楽しみにしています。

技対委員　井上卓也

フクイ建設技術フェア

道具箱作りに挑戦

自分の道具箱を作る

9月4日・5日に福井県産業会館にて16回目となるフクイ建設技術フェアが、公益財団法人福井県建設技術公社主催で開催されました。

最新の土木・建設の技術を産官学が展示・紹介するイベントです。

私たちは福井県建築業団体連合会の一員として、高専・工業高校で建築を学ぶ学生を対象に技能体験の一つである建築大工部門のお手伝いをしました。作る物は道具箱です。

道具は電動インパクトドライバー、手鋸を使用しました。ビスを「もむ」「なめる」という言葉や、トリガの引き具合で回転数を調整するインパクトドライバーの使い方を説明して作業を開始しました。

ビスをもみすぎて頭が深く入りすぎてしまうことが多く、初めて使う道具に四苦八苦しながら完成させていました。完成品は杉板の本格的な道具箱で「大きさは少し小型ですが一生使える道具箱ですよ」と説明すると満足そうに顔がほころんでいました。

「卒業後は大工になりたいです」という学生もいて頼もしく感じました。

技対委員長　近藤秋仁

『今年も参加!! フクモクフェス』

今年も9月7日・8日サンドーム福井にて開催されたフクモクフェス2024に、福井県建築組合青年部として、ワークショップを出展しました。

青年部の参加人数は、各ブロックからの応援参加の方も含め7日に9名、8日に8名、事務局長も両日お手伝いに駆けつけてくれました。

ワークショップは、簡単に組み立てできる木製のティッシュBOXキットの塗装体験と、丸太杭を手ノコで切ってコースターを作る手ノコ体験で両方を行い500円という内容です。建築組合青年部らしいワークショップにすべく、役員会にて話し合い、試作会を行なった上で決定しました。

フクモクフェス昨年の来場者は1万1千人だったようで、さすがに1万人を超える規模のイベントで土日開催ということもあり、青年部ブースは両日ともに大にぎわい、休む間もありませんでした（笑）

80組分の準備をしたものの結果75組でした。想定以上に時間をかけて塗装されるお子さんたちもいたことや、特に忙しいのが昼以降に集中してしまい時間が足りなかったことなど、来年への課題も見つかりました。

しかし、おかげさまでたくさんの子どもたちの笑顔を見ることができました。来場されたたくさんのお客様にも、建築組合青年部のPRになったと感じています。

参加していただいた皆様の臨機応変な対応のおかげで、無事に2日間終えることができました。本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

青年部長　土田洋輔

塗装に夢中な子どもたち

保険証廃止・2～3年に1度の職種及び種別に関する調査

9月19日・20日に中建国保支部研修会が、徳島県徳島市で開催されました。中建国保加入支部から今年は30支部77名の支部職員が出席しました。

福井県からは、中建国保担当の笠川主任と鈴村が出席し、2日間にわたり「歯周病・アルコール・メタボリックの関係性」と題した講演、「被保険者証廃止後の対応」「組合員の職種及び種別に関する調査」についてなど研修を受けました。

中でもこの議事のために来たと言っても過言ではない「被保険者証廃止後の対応について」。

皆さんもご存知の通り12月2日に保険証が廃止され、マイナ保険証が導入されます。かと言って今お手元の保険証が使用できなくなる訳ではなく、来年3月31日まで使用できますのでまずはご安心ください。

研修を受けて正直、頭の中は、パニックです。色々な事例に対しての応対がややこしくてこれを残り少ない日数で他の業務もやりながら窓口として把握できるのか不安しかありません。

そして何より、マイナンバーカードを持っていれば保険証として使用できると勘違いしている方が多いので、紐づけのやり方を国はもっと周知すべきかと思います。任意のはずがほぼ強制、それに伴い中建書類のマイナンバー記入もほぼ強制…

思うことは山ほどありますが、組合員さん・そのご家族が困ることがないようにすることが1番なので、しっかりと対応できるよう努めたいです。

そんな中での「組合員の職種及び種別に関する調査」の実施が来年1月に開始決定。調査票が届いた際には提出のご協力をお願いいたします。（またその時期がきましたらお知らせいたします。）

保険証廃止後の対応に職種及び種別に関する調査…ため息しかでませんが、がんばります。

中建国保事務職員　鈴村裕子

熱心に質問する担当職員

組織部長会議で発表した
福井県建築組合連合会が今後5年以内に取り組むべき新たな試み

① 組織・財政基盤の確立

（A）組織の確立
（B）既存会員の活性化
（C）財政基盤の確立
（D）行政・団体等との連携による信頼性の確保と事業連携の模索
（E）数値目標

② 会員サービスの拡充

（A）福利厚生事業の拡充
（B）技術者育成、技能向上支援
（C）経営支援の強化
（D）仕事確保策の推進
（E）会員家族等へのサービス拡大

③ 時代に対応した情報発信力の強化

（A）今の時代に即した発信強化
（B）建設業に関係する専門情報発信
（C）職人による住宅の提案（高齢者世帯、若者世帯）
（D）イベント等での紹介動画、ユニフォーム、
　　一般向けパンフ・ポスター、備品などの整備

④ 地域生活、地域経済への貢献

（A）地域生活への貢献　（B）地域経済への貢献

⑤ 事業遂行における環境の整備

（A）組織全体　（B）事務局体制の強化

⑥ 新時代への挑戦

（A）DX、EX、GXなど時代に即した県連事業の研究
（B）建築業界を網羅した研究チームの創設
（C）大学等研究機関とのタイアップ
（D）福井県発　大工職人による木造住宅の提案
（E）国際貢献　外国人労働者　技術の海外移転

全国育樹祭に参加

10月20日に全国育樹祭がサンドーム福井にて執り行われました。担当県は我が福井県。

そこに参加させていただいたのですが、この案内を頂いたのがなんと1年前。こんなに前から段取りしていて、実に用意周到。失敗は許されないと言う思いが、ヒシヒシと感じられました。

その後春にもう一度案内があり、5月に出欠票が送られてきました。それだけで十分かと思いきや、8月に入場許可証などの書類が送られてきました。

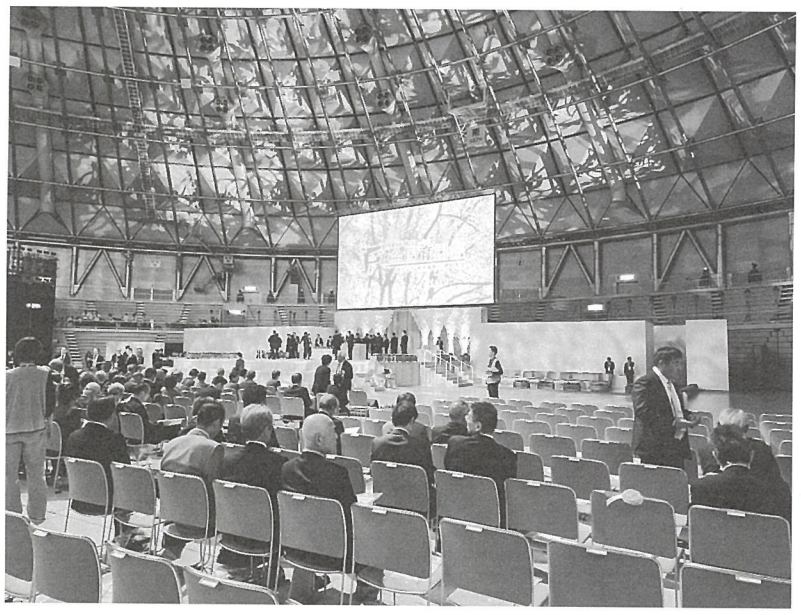
その説明には、時間20分前には受付を済ませること。受付に貴重品や携帯電話を預けること。

なんだか国家試験を受験するみたいに厳重な入場。やはり皇族の方が参列するとなると、おのずと警備関連が厳しくなるのは仕方がない。

それで、なぜ我が社が案内をいただいたのか。案内文ではわかりにくいですが「地域材活用功労感謝状」みたいな賞を頂きました。ここでもなぜ我が社が。との疑問は残るが、大変名誉なことなのでありがたく拝受させて頂きました。

この賞をいただいて改めて思うことは、もう15年以上県産材を主に扱って家を建ててきました。初めは補助金ありきの使用でしたが、長年使っていると米松を使いたくなくなっています。香り、木の表情、扱いやすさなど、どれをとっても我が社にはしっくりきます。たとえ補助金がなくなっても、このスタイルは変えられない。そこに見える材料を使用し、輸送によるCO2削減しSDGsにも大きく貢献する。今後、このスタイルが多くの工務店に浸透することを願っています。

小浜組合通信員　杉谷光由



授賞式前の会場の様子